

講義御礼「性の多様性と LGBTQ プラス・インクルーシブ教育」を受けて

村松恵 医療系メディア勤務
看護師／皮膚・排泄ケア認定看護師
医療的ケア児の親

このたびは「性の多様性と LGBTQ プラス・インクルーシブ教育」に関するご講義を拝聴する貴重な機会を賜り、誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

自分の中にあった「当たり前」に気づかされた時間

先生の講義は、性のあり方を「男性」「女性」といった枠に押し込めてしまっていた自分の認識に揺さぶりをかけるものでした。

「性のあり方は人の数だけある」——この言葉は、今でも私の中に深く残っています。

日常の中で気づかぬうちに作り上げていた「当たり前」や「普通」の感覚こそが、誰かの存在や選択を見えづらくしてしまうということ。

性自認、性別表現、恋愛や性的指向について、こんなにも多様で、揺れ動くものであるということを経験的に学べたことは、看護師としての実践だけでなく、親としての在り方にも大きな示唆をもたらしてくれました。

息子と初めて交わした「性」の会話

講義のあと、私は中学一年生の息子と性教育について話してみました。

「小学校の授業では、男女分けられることなく、みんなで一緒に学んできたよ」と息子は話してくれました。

その姿に、子どもたちは今、かつての私たちが受けてきたような「性別で分けられる前提」から、少しずつ自由になりつつあるのだと感じました。

また、「女子って、生理のときつらいんでしょ？」と口にした彼の言葉からは、思春期を迎える今、他者の身体や感情に対して、想像力をはたらかせようとする姿勢が見えた気がしました。

このような会話を生むきっかけをくださったことに、改めて感謝申し上げます。

看護師として出会ってきた「ことばにならない性」

私は看護師として、排泄に課題を抱えた子どもたちと多く関わってきました。

そのなかには、先天的に外性器が形成されずに生まれたお子さんや、ご家族と共に「どう育てていくか」に悩まれていた方もいらっしゃいました。

医療の現場では、染色体やホルモン、外性器の有無など、生物学的な判断に頼りがちです。

実際に、染色体は男性であっても、出生時の形態や外見から「女性」として育てられた方も関わってきました。

今思えば、性の多様性についての理解が自分の中にもっとあったなら、その方が抱える葛藤や背景に、もう一步寄り添えたのではないかと悔いが残ります。

講義の中で語られていた「社会が作った性別ラベリングの困難さ」に、自分が当事者やご家族に無意識に背負わせてしまっていたものがあつたかもしれないと振り返る時間にもなりました。

「母親らしさ」に違和感を抱く自分

少し話は逸れるかもしれませんが、私は「母親になる」ということ自体に、どこか照れくささや、違和感のようなものをずっと感じてきました。

誰かに「ママ」と呼ばれる自分にしっくりこない感覚——それを言葉にすることができずにいました。そんな私を見て育つたからか、息子は私や夫のことを「ママ」「パパ」とは呼ばず、自然と名前で呼ぶようになりました。

これは私たちが強制したものではなく、彼が自ら選んだ呼び方です。

「性のとくせい」とは、何か特別な人にだけあるものではなく、誰もが持つその人ならではの感覚なのだ、先生のお話を聞いて感じました。

私自身がこれまで無自覚に言葉にできなかつた違和や曖昧さも、性の多様性のなかに含まれる「揺れ」の一つであることに気づけたことは、大きな学びとなりました。

医療者として、親として、アライであるために

性のあり方や表現に正解や分類はなく、本人が「そう感じていること」が何よりも尊重されるべきものだという姿勢に、深く共感いたしました。

そして、私たちは、「学び続けること」「問い続けること」を怠ってはいけない——そう肝に銘じました。先生がおっしゃっていた「これは筋トレのようなもの」という言葉が、今の私の支えになっています。少しずつでも、自分の中の偏見やバイアスを見つめ直し、目の前の誰かが安心して「そのままの自分」でいられる空間を作れるよう、努めてまいります。

結びにかえて

先生の講義を通して得た気づきと学びは、私の実践の中に生きていくものであると確信しています。今後も医療者として、また子を持つ一人の親として、性の多様性と向き合う姿勢を忘れず、日々学びを重ねてまいりたいと思います。

最後になりますが、先生のますますのご活躍とご健康を、心よりお祈り申し上げます。

このたびは本当にありがとうございました。